

「中国のメディア・リテラシー教育」の視察調査

東北大学大学院情報科学研究科

メディア文化論研究室

関本 英太郎（教授）・韓 放（博士後期課程2年）

2009年11月11日から15日にかけて、中国のメディア・リテラシー教育の現状を知ろうと、北京に向いた。主に視察調査したのは、北京市東城区黑芝麻胡同小学校5年生の「メディア・リテラシー教育実験コース」。そこで指導するのは、張潔研究員をヘッドに研究室の学生からなる「中国コミュニケーション大学媒体素養教育研究室」（中国語でメディア・リテラシーは「媒体素養」）のメンバーである。

中国のメディア・リテラシー教育は、1990年代後半に始まる。先進国の欧米をモデルにその概念が紹介された後、大学、小中の学校現場、また民間の文化センターなどの機関で理論研究とともに実践的な取り組みが展開されてきた。北京市中心地に位置する黑芝麻胡同小学校で5年生を対象に「実験コース」がスタートしたのは、2008年9月。最新のカリキュラム案では年間30回のプログラムが組み立てられ、日本で言えば、「総合的学習の時間」に実施されている。

私たちが視察したのは、アニメの回。前回の授業を復習し、提出物を評価し、優れた回答を提出した児童を拍手で称える。次ぎが当日の課題。アニメはどんな風に作成されるのか。まず映像が「残像効果」のメカニズムに基づいていることをわかりやすく説明する。その後児童全員に工作させながら体験的に学ばせる。授業時間は40分にすぎないが、内容はたっぷり。

学ぶことの多い貴重な視察研修であった。今回紹介した事例は、確かに先進的であり特殊である。しかし、指導に当たる張潔氏は、意欲的に中国各地に周り、教員相手にメディア・リテラシーの必要性を説き、実践研修を実施しているそうである。その根は着実に広がりつつあると言えるのではないか。



写真 張潔研究員と「残像効果」を学ぶための
工作に励む児童



写真 小学校での視察調査を終えて